古英語 gedrefednes とラテン語 conturbatio について

石原　覚

I

前号において筆者は，「混乱させる，かき乱す」の意味を共有する古英語 gedrefan とラテン語 conturbo との対応関係について論じた[1]。それぞれの名詞形である古英語 gedrefednes とラテン語 conturbatio もまた訳語と原語の関係となる。本稿では，conturbatio の訳語として gedrefednes が用いられても，ラテン語原文にかかわりなく自由に補われた語と共起することにより，原語の conturbatio の意味が正確には伝えられていないケースがあることを明らかにしたい。

まず gedrefednes の基本的な意味を確認しておこう。この古英語の原義は「混乱」であり，これは smyltnes（静けさ，平安）の反意語として用いられた以下の(1)に見ることができる。

(1) ne his rices bið æfre ænig ende. Ac he us eallum gifeð, gif we geearnian willað, rice butan ende & blisse butan gnornunge & smyltnesse butan *gedrefednesse* & leoht butan þeostrum & lif butan deaðe & hælo butan sare & ecnesse butan ende, (*HomS 1 (Verc 5)* 200)[2]

「彼の王国には決して終わりがなく，我々が手に入れたいと望むならば，終わりのない王国，悲嘆のない喜び，混乱のない平安，闇のない光，死のない命，苦しみのない救い，そして終わりのない永遠を，我々皆に彼は与える。」

続いて gedrefednes は，以下の(2)～(6)における如く「精神的動揺，不安，苦しみ」の意味を持つ。(2)の gedrefednes は，疫病のもたらした惨禍に対する悲しみを表している。

(2) se gefea wearð swiþe raðe on heora mode to *gedrefednesse* gecierred, þa

hie gesawan þa deadan men swa þiclice to eorþan beran (*Or 3* 10.75.21)[3]
「死者が次から次へと埋葬されているのを見ると，その[勝利の]喜びはたちまち彼らの心の中で苦悩に変わった。」

(3)においてこの語は，幸福のさなかでも感じられる不安を表すのに用いられている。

(3) næs ic næfre git nane hwile swa emnes modes, þæs þe ic gemunan mæge, þæt ic eallunga wære orsorg, þæt ic swa orsorg wære þæt ic nane *gedrefednesse* næfde; (*Bo* 26.59.2)[4]
「完全に気楽なほど―― 何の悩みもないまでに気楽なほど――平静な心でいたことは，思い出せる限り私には一時もなかった。」

この gedrefednes は，ラテン語原文の "libero me fuisse animo quin aliquid semper angerer reminisci non queo (Boet. *Cons.* 3.3.6)"[5]（常に多少は悩みを感ずるということがないほど自由な心でいたことは，私には思い出せない）における ango（悩ませる）に緩く対応している。(2)(3)は共に，Bosworth-Toller, *An Anglo-Saxon Dictionary* (BT)[6] の *Supplement* (BTS)[7] の *gedrefednes* III. tribulation, trouble, anxiety, distress（苦難，苦しみ，不安，苦悩）および *The Dictionary of Old English: A to F* の *gedrefednes* 1.b. mental agitation（精神的動揺）の下位区分 1.b.i. distress, disquiet, vexation（苦悩，不安，悩み）にそれぞれ引用されている例である。(4)は，Ps. 118.106 の「私は……あなたの裁きとあなたの義を守ると誓った」("Ic swor . . . ðæt ic wolde gehealdan ðine domas & ðine ryhtwisnesse" (*CP* 65.465.23)[8]）を受けての記述である。ここで gedrefednes は，詩篇作者に自分の無力を知らしめる苦難を表現するのに用いられている。

(4) Ac he ongeat swiðe hraðe, ða he gemette ða *gedrefednesse*, ðæt hit næs on his agnum onwalde ðæt he meahte gehealdan ðæt ðæt he ær gehet & swor. (*CP* 65.465.26)
「しかし苦しい目に会うと，彼は自分が約束し誓ったことを守るだけの力が自らにはないことにたちまち気付いた。」

上の gedrefednes を含む節は，ラテン語原文の ". . . debilitatem suam protinus turbatus invenit (Greg. M. *Past.* 4)"[9] (……すぐに苦しみながら自分の弱さに気付いた）における turbatus (乱れた，苦しんだ）を拡大解釈したものである。(5)で gedrefednes は，魂の働きを妨げる肉体的苦痛について用いられている。

(5) heo ne mæg god geseon swa swa heo wilnað for þæs licuman hefenesse and *gedrefednesse*, buton mid miclum geswince þurh geleafan and tohopan and þurh lufe. (*Solil 1* 30.2)[10]

「それ[魂]は，肉体の重荷と難儀故に，信仰と希望，そして愛による多大な努力なしには，それが望むようには神を見ることができない。」

この gedrefednes は，ラテン語原文 ". . . quia multas molestias corporis sustinet, . . . (1.7)"[11] (……[魂は]多くの肉体的煩いに耐えているが故に，……) における molestia (苦しみ) を hefigness (重苦しさ) と共に表している。(6)の gedrefednes は，配下の修道士から修道院の外に出たいという執拗な要求を受けた，修道院長の煩いを表している。

(6) se ylca arwurða fæder wearð geswenced mid *gedrefednysse* his swiðlican onhropes & þa yrre het, þæt he aweg gewite. (*GD 2 (H)* 25.156.5)[12]

「この高僧は彼の並外れた執拗さによる煩いで疲れ果て，彼に立ち去るよう怒って命じた。」

上の gedrefednes は，ラテン語原文の ". . . nimietatis eius taedio affectus, . . . (Greg. M. *Dial.* 2.25.1)"[13] (……彼の執拗さにうんざりして，……) における taedium に由来する。このラテン語が表す「反感，嫌気，嫌悪感」[14]という感覚は苦しみに通じ，よって gedrefednes が訳語として用いられたと考えられる。

II

ラテン語 conturbatio は，gedrefednes と同様「混乱」を原義とする。この意味の conturbatio を古典期の作品に求めれば，精神の変調について用

いられた下の(7)がある。

(7) Est autem quaedam animi sanitas, quae in insipientem etiam cadat, cum curatione medicorum *conturbatio* mentis aufertur. (Cic. *Tusc.* 4.13.30)[15]

「医者の治療により精神の混乱が除去されれば，愚か者にも享受し得るある種の精神の健康がある。」

この例は，*Oxford Latin Dictionary* (*OLD*) の *conturbatio* 1. A disorder (of mental or physical functions), distemper（(精神または肉体的機能の）乱れ，異常）という conturbatio の第一義の用例に引かれているものである。ウルガータ（Vulgata）[16] およびその周辺から，この「混乱」という原義で用いられた conturbatio を求めれば次の二例が挙げられる。(8)は天変地異の描写，(9)は Ps. 76.17 の「諸々の深淵がかき乱れた」(“turbatae sunt abyssi”) を受けた注釈である。

(8) apparuerunt voces et tumultus et tonitrua et terraemotus et *conturbatio* super terram (Esth. 11.5)

「叫び，騒ぎ，雷，地震，そして混乱が地上に現れた。」

(9) Nemo ergo iam miretur abyssorum *conturbationem*, quando sagittae tuae pertransierunt. (Aug. *Psalm.* 76.20)[17]

「[神の言葉こそが矢であり，……]よって諸々の深淵の混乱は最早誰も驚くにはあたらない。『あなたの矢は通り過ぎた』のだから。」

さらに conturbatio は，次の古典期からの二例における如く，gedrefednes にも見られる意味「精神的動揺，不安，苦しみ」を表す。この語は，(10)では metus（恐怖）により定義され，(11)では傷害を犯した直後の動揺について用いられている。

(10) *conturbationem* metum excutientem cogitata, . . . (Cic. *Tusc.* 4.8.19)[18]

「『狼狽』を思考を追い払う恐怖と[定義し]，……」

(11) post rem: pallor, rubor, titubatio, si qua alia signa *conturbationis* et conscientiae, . . . (Cic. *Top.* 12.52)[19]

「事件後に[問われるのは，このようなことである]，蒼白，紅潮，よろ

めき，その他うろたえと罪の意識の兆候，……」

これらは，*OLD* の *conturbatio* 2. (esp.) A disorder of the emotions, perturbation, dismay ((特に) 情緒の乱れ，動揺，狼狽) において引用されている例である。以下，ウルガータから「精神的動揺，不安，苦しみ」を意味する conturbatio の用例を引く。

(12)non laborabunt frustra neque generabunt in *conturbatione* (Isa. 65.23)

「[私に選ばれた者たちは]いたずらに労苦せず，また苦しみのうちに子を産むこともないであろう。」

(13)fili hominis panem tuum in *conturbatione* comede / sed et aquam tuam in festinatione et maerore bibe (Ezek. 12.18)

「人の子よ，お前のパンを苦しみのうちに食べ，／またお前の水を急いて悲嘆のうちに飲め。」

(14)in omnibus portis eorum dedi *conturbationem* / gladii acuti et limati ad fulgendum amicti ad caedem (Ezek. 21.15)

「鋭い，きらめくまでに磨かれた，殺戮のために整えられた剣の／恐怖を，私は彼らのすべての門に置いた。」

(12)では生まれてくる子に災いが降りかかるのではないかという不安について，(13)では国土の荒廃に対する恐怖について，(14)では虐殺に対する戦慄について，conurbatio は用いられている。

III

このように同じ意味を共有するため，gedrefednes は conturbatio の訳語として用いられる。以下その例をいくつか見てみよう。(15)は Prov. 15.6 に与えられた古英語の注解である。

(15)hus soðlice rihtwises mæst strencð on wæstmum arleases *gedrefednyss*

[Domus autem iusti plurima fortitudo. in fructibus impii *conturbatio*; (しかし正しい者の家は非常に力強く，悪しき者の所得には混乱[がある]。)] (*LibSc* 14.18)[20]

Prov. 15.6 の conturbatio は，*OccGl 49* 15.6 においても同じく gedrefednes

へと訳されている[21]。

古英語によるA～Kの11種の詩篇行間注解（interlinear glosses to the Psalter）[22]において，A～Eの詩篇のラテン語本文はウルガータ以前の古ラテン語訳（Vetus Latina）のRoman Psalter (Psalterium Romanum), F～Kのそれはウルガータの Gallican Psalter (Psalterium Gallicanum) である。Roman PsalterとGallican Psalterにおけるconturbatioの用例は，共に30.21においてのみであるが，前者のその個所を以下に示す。神の恩恵としての保護を歌ったくだりである。

(16) abscondes eos in abditu uultus tui a *conturbatione* hominum (Roman Ps. 30.21)[23]

「あなたは彼ら[あなたを畏れ，待ち望む人々]を，あなたの顔の隠れ場に，人々の苦しみ[混乱]から隠すであろう。」

Gallican Psalterの対応個所では[24]，(16)の "in abditu uultus tui"（あなたの顔の隠れ場に）が同義の別の表現 "in abscondito faciei tuae" となっている点を除けば，(16)との間に異同はない。Roman PsalterとGallican Psalterの30.21のconturbatioが，A～Kにおいて与えられている注解を示すと，以下の通りである。

ABCDFGHI gedrefednes

E gedrefnes

J wiþersæc

K drefednes

E，Kでgedrefednesと同義のgedrefnes，drefednesが，Jで誤記[25]のwiþersæc（反抗）が用いられている他はgedrefednesが与えられており，この語がconturbatioへの注解として優勢であると認められる。

Roman Psalterの1-50.10の古英語散文による自由訳である*PPs (prose)*[26]においても，(16)のconturbatioは以下の如くgedrefednesをもって表現されている。

(17) Þu hi gehydst and gehyldst hale and orsorge, ægðer ge modes ge lichaman, butan ælcere *gedrefednesse* þe menn þrowiað. (*PPs (prose)* 30.22)

「あなたは彼らを，精神についてもまた肉体についても，無事に煩いもなく，隠し守る。人々が被るあらゆる苦しみもなしに。」

ここで注意すべきは，ラテン語原典である(16)において conturbatio を修飾する複数属格形の名詞の "hominum"（人々の）が，古英語訳の(17)では "þe menn þrowiað"（人々が被る）という関係詞節へと拡大解釈されている事実である。BT は，この(17)を gedrefednes の用例の一つとして，ラテン語原文と共に引用している[27]が，(17)において原語の conturbatio の意味は果たして正確に反映されているのであろうか。以下この問題について考えてみたい。

IV

(16)のギリシャ語原文[28]に目を向けてみよう。七十人訳聖書(Septuaginta) における対応箇所は以下の通りである。

(18) κατακρύψεις αὐτοὺς ἐν ἀποκρύφῳ τοῦ προσώπου σου ἀπὸ *ταραχῆς* ἀνθρώπων, (Ps. 30.21)

「あなたは彼らを，あなたの顔の隠れ場に，人々の苦しみ[混乱]から隠すであろう。」

問題の(16)の conturbatio は，(18)の ταραχή を訳したものである。このギリシャ語の原義は，conturbatio と同じく「混乱」であり，この意味は以下の(19)（John 5.3 に続く異読）において，池の水の乱れを表す例に見ることができる。

(19) αγγελος γαρ κυριου κατα καιρον κατεβαινεν εν τη κολυμβηθρα και εταρασσε το υδωρ· ο ουν πρωτος εμβας μετα την *ταραχην* του υδατος (John 5.3[4])[29]

「主の使いが時々池に降りて水を動かしたので，水の動きの後で最初に[池に]入った者は[どんな病気に罹っていても治ったからである。]」

続いて ταραχή は，(20)におけるように「精神的動揺，不安，苦しみ」の意味を表す。ここでこの語は，天上の異変による人々の動揺について用いられている。

(20) αὐτὸς δὲ ἦν ὑπερβάλλων τὸ φῶς αὐτοῦ ὑπὲρ πάντα· ταραχή τε ἦν, πόθεν ἡ καινότης ἡ ἀνόμοιος αὐτοῖς. (Ing. *Eph.* 19.2)[30]

「それは全て[の星]をその光において凌駕していたので，それら[他の星]とは異なる新奇なものがどこから来たのかと[人々に]不安が生じた。」

(18)の ταραχή が，*A Greek-English Lexicon of the Septuagint* において "vexation"（苦しみ）と解釈されている[31]のは，ταραχή のこの語義に即して理解されたと見られる。

ラテン語 conturbatio も「精神的動揺，不安，苦しみ」の意味を表すことについては，すでに見た通りである。よって，ギリシャ語原典において原語の ταραχή が持つこの「精神的動揺，不安，苦しみ」の意味が，(16)の conturbatio に反映していると考えることは可能である。

その一方で注目すべきことは，ταραχή には，人間集団ないしは社会について「混乱」を意味する用例が認められるという事実である。例えば次の(21)（Mark 13.8 の異読）においてこの語は，世の終末が来る前に起こる騒乱について用いられている。

(21) ἐγερθήσεται γὰρ ἔθνος ἐπ' ἔθνος καὶ βασιλεία ἐπὶ βασιλείαν, ἔσονται σεισμοὶ κατὰ τόπους, ἔσονται λιμοί [και ταραχαι]· (Mark 13.8)[32]

「民は民に，国は国に対して立ち上がり，あちこちに地震があり，飢饉[と暴動]があるであろう。」

(18)の "ταραχῆς ἀνθρώπων" が，J. M. de Vinck と L. C. Contos による七十人訳の詩篇の翻訳において "the tumult of men"（人々の騒ぎ）と表されている[33]のは，ταραχή が有するこの意味に従って解釈されたと見られる。

同時に注目すべきは，conturbatio と同じ語幹を持つラテン語 perturbatio には，以下のごとく名詞の複数属格形を伴い，それが表す集団の「混乱」を意味する用例が存在するということである。(22)では奇襲を受けた陣営の壊乱について，(23)では世の終わりに先行する紛争について，perturbatio は用いられている。

(22)summoque metu ac *perturbatione hostium* replentes rebus prospere gestis abierunt (2 Macc. 13.16)[34]

「敵方の非常な恐怖と混乱で[敵陣を]満たし，首尾よく手柄を立てて引き揚げた。」

(23)cum tot signa perturbationis dicta sint, oportet ut eorum considerationem breviter per singula perstringamus, . . . Ait enim: Surget gens contra gentem, ecce *perturbatio hominum*; (Greg. M. *Ev.* 35.1)[35]

「[Luke 21.10-11 には]かくも多くの混乱の徴(しるし)が述べられているので，それらについての考察を一つずつ簡潔にまとめるべきである。……即ち彼[主]は言う。『民は民に対して立ち上がるであろう。』見よ，[これは]人々の混乱[のことである]。」

さらに，接頭辞のないラテン語 turbatio にも同じ用例——名詞の複数属格形により修飾され，「（集団の）混乱」を意味する例——が見られることについては，内紛に瀕した状況を表す次の(24)の turbatio を参照されたい。

(24)In hac *turbatione rerum* in contionem vocari placuit. (Liv. 24.28.1)[36]

「この情勢の混乱において，[人々が]会議に召喚されることに決まった。」

問題の(16)の conturbatio も名詞の複数属格形 “hominum”（人々の）を伴っており，よって上記の perturbatio，turbatio と同じ意味で解釈し得る。

故に，原語の ταραχή が持つ「(集団の)混乱」の意味が，(16)の conturbatio に反映していると考えることもまた可能である。実際 V. Thalhofer は，(16)の “conturbatione hominum” を “Menschenfehde”（人間の不和）と解釈している[37]。

以上から，(16)の conturbatio は，

1.「精神的動揺，不安，苦しみ」

2.「(集団の）混乱」

の二通りの意味で解釈可能であると言える。

V

ここで重要なのは，(17)の gedrefednes が，ラテン語原文に対応語のない，「（苦痛を）被る」[38]を意味する古英語 þrowian の目的語となっている点である。*PPs (prose)* の中で þrowian は，(17)以外にもう一例以下の(25)において，同じくラテン語原文と無関係に現れるが，この動詞が持つ「(苦痛を)被る」の意味はここに明瞭に見て取れる。

(25)Gesyhst þu nu (cwæð se witega to Drihtne) hwylc broc and hwylc sar we þoliað and *þrowiað*? (*PPs (prose)* 9.34)

「あなたは今見ているのか（と預言者[ダビデ]は主に言った），我々がいかなる苦しみ，いかなる痛みを受け，被っているかを。」

この動詞により支配された gedrefednes は，P. P. O'Neill が(17)の「類似表現」("a close verbal parallel") として挙げる[39]以下の(26)におけるごとく，苦痛と関連する意味を表すはずである[40]。

(26)þæt hit mæge hal & orsorh fleogan to his earde, & forlætan ælce ðara *gedrefednessa* ðe hit nu *ðrowað*. (*Bo* 36.104.33)

「それ[お前の精神]が無事に煩いもなく，その故国へ飛んで行き，それが今被っているあらゆる苦悩を捨て去ることができるようにと。」

故に，(17)において gedrefednes が，ラテン語原文に基づかない þrowian により支配されているという事実は，IV で示した，(16)の conturbatio が有する二つの意味のうち，より苦痛と係わる「精神的動揺，不安，苦しみ」の意味が，ラテン語原文と異なって強調されているということを示すものである。

以下は，(16)に続くラテン文，即ち Roman Ps. 30.21 の後半部である。(16)の "conturbatione hominum" は，(27)の "contradictione linguarum" と並行関係にあることがわかる。

(27)proteges eos in tabernaculo tuo a *contradictione linguarum* (Roman Ps. 30.21)

「あなたは彼らを，あなたの幕屋の中で，舌の反駁[争い]から保護するであろう。」

ラテン語 contradictio の原義は「言い返すこと，反駁」[41]であるが，この語はウルガータにおいては「争い」[42]の意味も表す。例えば以下の(28)では，敵による町の内部の騒擾を表すのに contradictio が用いられている。

(28)praecipita Domine divide linguas eorum / quoniam vidi iniquitatem et *contradictionem* in civitate (Ps. 54.10)[43]

「主よ，[敵を]突き落とし，彼らの舌を分かち給え。／私は町の中に不正と争いを見たからである。」

(16)の "conturbatione hominum" に「人々の（集団の）混乱」の意味が認められるならば，それに並行する(27)の "contradictione linguarum" は，「舌の反駁」という原義に解釈されるより，人間集団の混乱——つまり騒動や不和——に通ずる「舌の争い」の意味に解釈される可能性の方が高いと考えられる。(事実 Thalhofer は，この "contradictione linguarum" を "Widerstreit der Zungen"（舌の抗争）と訳している。）注目に値するのは，*PPs (prose)* では，下の(29)における如く，(27)の contradictio が，その「反駁」という原義に即して，「罵詈，悪態，叱責」[44]の意味の leahtrung へと訳されていることである。

(29) Þu hi gescyldst on þinum temple wið ælcere tungan *leahtrunge*. (*PPs (prose)* 30.23)

「あなたは彼らを，あなたの神殿の中で，あらゆる舌の悪罵に対して保護する。」

この事実は，*PPs (prose)* の訳者が，(16)の conturbatio に「(集団の）混乱」の意味を認めなかったことを示唆するものである。

PPs (prose) 30.22 では，ラテン語 conturbatio の訳語である古英語 gedrefednes が，ラテン語原文にかかわりなく補われた動詞 þrowian ((苦痛を) 被る) に支配されているため，原語の conturbatio が持つ「精神的動揺，不安，苦しみ」および「(集団の）混乱」という二つの意味のうち，より苦痛と係わる前者が，ラテン語原文とは異なり強調されている。故にこの箇所では，gedrefednes によって conturbatio が訳されていても，この原語の意味が正確には表されていないと結論できる。

注

1. 石原覚「古英語 gedrefan とラテン語 conturbo について」『愛知県立大学文学部論集』（英文学科編）第51号（2003年），33-44。
2. D. G. Scragg, *The Vercelli Homilies and Related Texts*, EETS 300 (Oxford, 1992), p. 121. 古英語の作品名の略記は，原則として A. Cameron et al., *The Dictionary of Old English: A to F* (Toronto, 2003) で使用されているものに従う。なお本稿における古英語，ラテン語およびギリシャ語の引用中のイタリック部分は，(10)を除き，すべて筆者によるものである。
3. J. Bately, *The Old English Orosius*, EETS s.s. 6 (London, 1980).
4. W. J. Sedgefield, *King Alfred's Old English Version of Boethius De Consolatione Philosophiae* (Oxford, 1899).
5. L. Bieler, *Anicii Manlii Severini Boethii Philosophiae Consolatio*, CCSL 94 (Turnholti, 1984), p. 41.
6. J. Bosworth and T. N. Toller, *An Anglo-Saxon Dictionary* (Oxford, 1898).
7. T. N. Toller, *An Anglo-Saxon Dictionary: Supplement* (Oxford, 1921).
8. H. Sweet, *King Alfred's West-Saxon Version of Gregory's Pastoral Care*, pt. II, EETS 50 (London, 1871; repr. Millwood, N.Y., 1988).
9. "Regulæ Pastoralis Liber," *Sancti Gregorii Papæ I, . . . Opera Omnia*, J.-P. Migne, PL 77 (Parisiis, 1862), col. 126C.
10. W. Endter, *König Alfreds des Grossen Bearbeitung der Soliloquien des Augustinus*, Bib. ags. Prosa 11 (Hamburg, 1922; Nachdr. Darmstadt, 1964).
11. Endter, p. 30.
12. H. Hecht, *Bischof Wærferths von Worcester Übersetzung der Dialoge Gregors des Grossen*, Bib. ags. Prosa 5, 1. Abt. (Leipzig, 1900; Nachdr. Darmstadt, 1965).
13. A. de Vogüé, *Grégoire le Grand: Dialogues*, t. II, SChr 260 (Paris, 1979), p. 212.

14. P. G. W. Glare, *Oxford Latin Dictionary* (Oxford, 1982), s.v. *taedium* 2 には "A feeling of repugnance or disgust, aversion" の語義が挙げられている。
15. J. E. King, trans., *Cicero: Tusculan Disputations*, rev. ed., Loeb Classical Library 141 (Cambridge, Mass., 1945), p. 358.
16. ラテン語訳聖書からの引用は，Ps. 30.21 を除き，R. Gryson et al., *Biblia Sacra iuxta vulgatam versionem*, 4. Aufl. (Stuttgart, 1994) による。
17. E. Dekkers et I. Fraipont, *Sancti Aurelii Augustini Enarrationes in Psalmos LI-C*, CCSL 39 (Turnholti, 1956), p. 1064.
18. King, p. 348.
19. H. M. Hubbell, trans., *Cicero: De Inventione, De Optimo Genere Oratorum, Topica*, Loeb Classical Library 386 (Cambridge, Mass., 1949), p. 418.
20. S. S. Getty, "An Edition, with Commentary, of the Latin/Anglo-Saxon *Liber Scintillarum*," Univ. of Pennsylvania diss., 1969, p. 143.
21. J. Zupitza, "Kentische Glossen des neunten Jahrhunderts," *ZfdA* 21 (1877), 29.
22. 以下古英語の各種詩篇行間注解は A～K で表す。それぞれのテキストは以下の通り。A: S. M. Kuhn, *The Vespasian Psalter* (Ann Arbor, 1965); B: E. Brenner, *Der altenglische Junius-Psalter*, AF 23 (Heidelberg, 1908; Nachdr. Amsterdam, 1973); C: K. Wildhagen, *Der Cambridger Psalter*, Bib. ags. Prosa 7 (Hamburg, 1910; Nachdr. Darmstadt, 1964); D: F. Roeder, *Der altenglische Regius-Psalter*, SEP 18 (Halle, 1904; Nachdr. Tübingen, 1973); E: F. Harsley, *Eadwine's Canterbury Psalter*, EETS 92 (London, 1889); F: A. C. Kimmens, *The Stowe Psalter*, Toronto Old English Series 3 (Toronto, 1979); G: J. L. Rosier, *The Vitellius Psalter*, Cornell Studies in English 42 (Ithaca, N.Y., 1962); H: A. P. Campbell, *The Tiberius Psalter*, Ottawa Mediaeval Texts and Studies 2 (Ottawa, 1974); I: U. Lindelöf, *Der Lambeth-Psalter*, Acta Societatis Scientiarum

Fennicae 35, i (Helsingfors, 1909); J: G. Oess, *Der altenglische Arundel-Psalter*, AF 30 (Heidelberg, 1910; Nachdr. Amsterdam, 1968); K: C. Sisam and K. Sisam, *The Salisbury Psalter*, EETS 242 (London, 1959).

23. R. Weber, *Le Psautier Romain et les autres anciens Psautiers latins*, Collectanea Biblica Latina 10 (Roma, 1953).
24. *Liber Psalmorum*, Biblia Sacra iuxta latinam vulgatam versionem 10 (Romae, 1953) を参照した。
25. G. Oess も指摘するように（p. 10），この wiþersæc は，conturbatio の後に並行して現れる contradictio（反駁，争い）に引きずられた「写字生の逸脱」（"Abirren des Kopisten"）である。
26. P. P. O'Neill, *King Alfred's Old English Prose Translation of the First Fifty Psalms* (Cambridge, Mass., 2001).
27. (17)は，BT, s.v. *gedrefednes* において "a conturbatione hominum" と共に，また C. W. M. Grein, *Sprachschatz der angelsächsischen Dichter*, neu hrsg. von J. J. Köhler (Heidelberg, 1912), s.v. *gedrefednes* においても "conturbatione" と共に，引用されている。
28. ギリシャ語聖書からの引用は，A. Rahlfs, *Septuaginta* (Stuttgart, 1935; duo vol. in uno, 1979); Nestle-Aland, *Novum Testamentum Graece*, 27. Aufl. (Stuttgart, 2001) による。
29. (19)は，W. Bauer, *Griechisch-deutsches Wörterbuch zu den Schriften des Neuen Testaments und der frühchristlichen Literatur*, 6. Aufl. hrsg. von K. Aland u. B. Aland (Berlin, 1988), s.v. ταραχή 1. eigtl. *d. Erregung* des sonst ruhigen Wasser（(原義)（普段は静かな水の）乱れ）に挙げられている例である。
30. K. Bihlmeyer, *Die Apostolischen Väter*, 1. Teil, 3. Aufl. (Tübingen, 1970), p. 88. (20)は，Bauer, s.v. ταραχή 2.a. *d. Bestürzung, d. Beunruhigung*（狼狽，不安）に挙げられている例である。七十人訳からの例としては，δεῖμα（恐怖）と共に用いられた "οἱ γὰρ

ὑπισχνούμενοι δείματα καὶ ταραχὰς ἀπελαύνειν ψυχῆς νοσούσης (Wisd. Sol. 17.8)"(病んだ魂から恐れと不安を追い払うと請合っていた者たち）参照。これは C. G. Bretschneider, *Lexicon Manuale Graeco-Latinum in Libros Novi Testamenti*, Editio Tertia (Lipsiae, 1840), s.v. ταραχή b に「恐怖について」("de terrore") 用いられた例として挙げられている。

31. J. Lust et al., *A Greek-English Lexicon of the Septuagint*, 2 vols. (Stuttgart, 1992-96), s.v. ταραχή.
32. (21)は，Bauer, s.v. ταραχή 2.b. *d. Aufruhr* (騒乱) に挙げられている例である。七十人訳からの例としては，反乱について用いられた "προνοούμενοι μήποτε αἰφνιδίου μετέπειτα ταραχῆς ἐνστάσης ἡμῖν τοὺς δυσσεβεῖς τούτους κατὰ νώτου προδότας . . . ἔχωμεν (3 Macc. 3.24)" (のちに突然の騒動が我々を脅かし，これらの邪悪な者たちが背後から反逆者たち……となることのないように用心して）参照。この例は Bauer の同項目において(21)と共に挙げられている。
33. J. M. de Vinck and L. C. Contos, trans., *The Psalms Translated from the Greek Septuagint* (Allendale, N.J., 1993), p. 34.
34. (22)は，C. T. Lewis and C. Short, *A Latin Dictionary* (Oxford, 1879), s.v. *perturbatio* I において，"confusion, disorder, disturbance" (混乱，無秩序）の意味を，その原義において示す例として挙げられている。
35. "XL Homiliarum in Evangelia," *Sancti Gregorii Papæ I, . . . Opera Omnia*, J.-P. Migne, PL 76 (Parisiis, 1878), col. 1260A. (23)の一行目の perturbatio は，A. Blaise, *Dictionnaire Latin-Français des Auteurs Chrétiens*, rev. par H. Chirat (Turnhout, 1954), s.v. *perturbatio* の "trouble, désordre, perturbation" (乱れ，無秩序，混乱）という第一義において，「世の終わりに先立つ混乱について」("en parl. des troubles précédant la fin du monde")の例として引用されている。勿論三行目の問題の perturbatio もこの原義を示す。
36. F. G. Moore, trans., *Livy: History of Rome, Books XXIII-XXV*, Loeb

Classical Library 355 (Cambridge, Mass., 1940), p. 264. (24)は，*OLD*, s.v. *turbatio* の "Disturbance, derangement; (esp. w. ref. to public order)" (乱れ，混乱（特に社会秩序に関して)) という第一義に引用されている例である。

37. V. Thalhofer, *Erklärung der Psalmen*, 9. Aufl. hrsg. von F. Wutz (Regensburg, 1923), p. 200.
38. BT, s.v. *þrowian* II. *to suffer* what is painful.
39. O'Neill, p. 223.
40. J. S. Cardale, trans., *King Alfred's Anglo-Saxon Version of Boethius De Consolatione Philosophiæ* (London, 1829) における(26)の現代英語訳 ". . . and be free from every one of the afflictions which it now suffers" (p. 269) 参照。
41. *OLD*, s.v. *contradictio* 1. The action of speaking in opposition.
42. J. Schmid, *Handwörterbuch des Kirchenlateins*, 3. Aufl. (Limburg-Lahn, 1949), s.v. *contradictio* 1 には "Widerspruch, Auflehnung, Empörung" (反駁，反抗，反乱) と共に "Streit" (争い) の意味が挙げられている。
43. (28)は，Blaise, s.v. *contradictio* 4 の "différend, contestation" (紛争，論争)の語義において挙げられている例である。(27)(28)の contradictio が由来するギリシャ語 ἀντιλογία も，七十人訳において "controversy" (論争)の 意味を表す場合があることについては，Lust et al., s.v. ἀντιλογία 参照。
44. BTS, s.v. *leahtrung*には "opprobrium, abuse, reproach" の語義が挙げられ，(29)が例示されている。